
死にゆく湖

たびがらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にゆく湖

【Nコード】

N3913T

【作者名】

たびがらす

【あらすじ】

湖で獲れる大きな貝や魚で生計を立てる宿場町にやってきた旅の二人連れ、鴉子とママヤ。二人は付近の神社に仕える白狐から、その湖に関する異常を調査するよう依頼を受ける。土砂崩れで流されてしまった水神の社を建て直すため、宿場町の名主の家を訪ねたところ…。

（前書き）

自分が考えるお話の中で、初めてまとまった短編です。時代劇と銘打っていますが、時代考証や風俗はメチャメチャです。最低限のまとまりは付けているつもりですが。

テーマや、訴えたい事などはありません。しかし、この中で取り扱っている環境変化は、実際に起こりうる（要素は多少味付けしています）ものです。化学的に取り扱うべき物を、そういうものが明らかになっっていない時代に発生した場合、それをどう認知して解決するか…という実験と思っただけならば幸いです。

死にゆく湖

第〇章 発端

人間の寿命など、植物の寿命に比べれば短いものである。だが命としてはどちらも平等に価値のあり、どちらも同じ生き物だという。確かに、山の歴史と共にあった巨木の幹が今立てている断末魔とも言える音は、それを教えてくれそうだ。だが、それを黙々と（若干の忍びなさが表情に表れていた）鋸で切り倒している漁民や農民達は、それを悲鳴や懇願の声なんとは感じなかった。

「しっかしなあ」

ほっかむりをした、青ひげの壮年の男が、鋸の手を休めて口を開いた。

「なんでまあ、こんな切り方さするっぺな……。見栄えが悪いいたらありやせんぞ」

「ほんと。麓から山のとっぺん近くまで刈り取るなんてな」

「だけどしゃあねえ。名主さまの言うことだもんな」

そういつて、木くずだらけになった男達は下方に広がる山すそを見た。確かにおかしな伐木だった。土師宮山はじのみやの山すそから中腹より上まで、巨大な半紙を広げたように伐採されているのだ。足下に残った大小様々な大きさの切り株が、以前の見事な山林を少しでも忘れさせまいと頑張っているようだった。

「土師宮さまが怒るぞ……って、うちのばさまが言ってたが」

「やめれ。やりきれなくなるぞ」

「土師宮さまもそうだが、ほれ、この下にある白貝水神さま！」

「ああ……自分の後ろでドタバタされて、良い思いはせんだろうな……」

「やめれって！今からどうしろっていうんじゃ！……もうわしゃ諦めるよ」

「やり切れないのう」

土師宮山を神体とする土師之宮神社はじのみやと、その眼下に広がる白貝湖に祀られている白貝水神社を汚している。…そういう思いが強かった。もちろん、反対する民の代表も居た。水神様が夢枕に立った（本当かどうかは定かではない）と言う者も居た。だがそれらの言葉は信用されなかった。土地を支配している人間が、ここでは一番偉いからだ。

木が切り倒され、みるみるうちに情けない格好にされていく山肌を、ヒノキの影から見ている双眸があつた。毛むくじやらのその青眼は、鋸を持った男達をジツと見つめて微動だにしなかつた。幸いな事に、その眼には恨みや憎しみ、怒りといった激烈な感情は似合わなかつた。ただ、悲哀と不安に満ちていた。

第一章 来る者

土師宮山を南東に望む北海道ほくたう峠を二人の男女が歩いてた。北往道ほくおうどうという街道に沿って旅をしているらしい。

男は髪を短くかりあげている。ぼさぼさとした黒めの栗毛と、時折見せるニカッという笑い方がその闊達な性格を物語っていた。うなじより少し上から幼蛇のようにひよろりと伸びる尻尾のような髪が、そよ風に吹かれて気持ちよさそうだった。目は一重にしては丸く大きく、その瞳は東の土壌のような黄土色だった。さらに黒い線が瞳に放射状に入っているため、獣のように見える。服は黒っぽ

いさび色で、腰には脇差しが一本だけ入っており、どっから見ても浪人だった。

女のほうはさっぱりとした清潔さと、男とは釣り合いが付かない美しい容姿をしていた。細く華奢な身体に白い上掛けと紅色の袴をそれぞれまとい、腰辺りまで整えられている濡羽の黒髪のおかげで、座った後ろ姿だけを見れば誰もが人形かと思いきや突然の動悸を覚えることだろう。とび色の眼は二重の切れ長で、その名の鳥と同じように瞳がすつと鋭く動くのが、観る者に狙われる小動物と同じ緊張を与えそうだ。しかし、男の下らない洒落にも屈託のない笑いを返しているところを見ると、猛禽と違ってどう猛な気性ではないようだ。唇は薄く紅を付けているらしく、血色の良い柔らかい部分を、そのよく動く眼と共に引き立てていた。どうやらどこかの神社に使える巫女らしい。

「…それでしてね鴉子とぎ。そいつは茶釜になつてやるといっているのでやらせてみたんですよ。良くねえ良くねえ。火に掛けてやったら、炭を蹴散らして障子破いて出てっちゃった」

「あなたはひどい人ね」

鴉子と呼ばれたその巫女は、眉間にしわを寄せ、細い眉を八の字にして男を叱った…笑いながら。

「化けてもんは身の程を知らないといけないですよ！何にでもなれば良いってもんじゃないですよ」

「……………」

鴉子はじつと何かを見つめていた。それに気付いた連れの男が、その固定された視線の先を追ってみると、峠の崖をのぞき込みながら右往左往している女がいた。横顔からも焦慮が見て取れるほど困っているようだった。

「 マミヤ」

「はあ」

鴉子は男の事を『マミヤ』と呼び、付いてくるように促した。男は、いかにも面倒くさそうに、眼を三角形にしていた。

「…どうかしましたか？」

マミヤは鴉子の言葉を聞きながら「やっぱり！」という感じで、心の中で洗面を作った。それはもう、ゴミをたっぷり吸い付けた雑巾を絞るのと同じように、嫌な気持ちに泥水のようにあふれ出した。「あ…」

困り人の顔が少しだけ明るくなった。だが、すぐに表情が暗くなる。

「狸が山から突然出てきて…手荷物を放してしまっただんです」

鴉子とマミヤは顔を崖っぷちから突き出して観察すると、かなり急な勾配の山肌中腹に、小さな荷物が引っかかっていた。

「為替の手形が入っているの…これでは次の宿からは文無しです」

「心配には及びませんよ。…マミヤ、取ってきて頂戴」

「そんな…無茶です」

女は巫女のとりにいる男をみやって言った。縄で吊りながら降りていくのだろうが、そんな危険を冒させる訳にはいかないというようだった。

「でも、無いと困るんだろ」

黙っていたマミヤが喋った。

「ええ…」

女が了承するが早いか、マミヤは天を仰いで何かを考えた。次の瞬間、ぱっ！と黄土色の煙が、彼を包み込むというか、彼が煙そのものになったかのように発生した。それが収まるよりも早く、煙の中から一羽の大きな鷹が飛び出してきた。さび色の羽毛、黒い脚、黄土色の眼といった、配色の部分的な適当さが見られるが、姿形は見事な鷹だった。

女は目を丸くして、煙が晴れてきたほうを見た。誰もいない。さつきまでそこに立っていた、見た目だけはぱりつとした浪人（さげすみを込めて）は、跡形もなく消えていた。そして巫女は、ニコニコと微笑んでいた。

「ご主人」

適当な色の鷹が、巫女に向かって喋る。それにも驚いて、女は心の臓腑が停まりそうだった。

「一の腕を貸して下さい。このままじゃ滑空もできませんや」

巫女は、その横柄な態度の鷹を腕に乗せてやると、「それ！」と喋って空へ放った。もちろんだが、その鷹は翼長一三尺半（一メートル）の翼を広げ、高らかに鳴きながら飛び立った。春も近づく暖かな青い空を、ぐるぐると調子を上げるように飛び回る。急降下を行ったり、その落下の勢いを上昇の力に転じて急上昇したりと、まさに猛禽の機動力を二人の女人に見せつけていた。

「あの…あのお侍さまは…」

「あそこで飛んでいますよ、ほら」

巫女は「しょうがない人」という感じで微笑みながらマミヤを目で追っていた。

「でも…あれは鳥ですよ…？」

「マミヤは化けが得意なんです」

すわ妖術か。禁断の呪術を使って、自分を惑わしているのではないかと、女は気が気ではなかった。

「マミヤ！早く取ってきて頂戴！」

了解した　という返事なのだろう。一層高らかに鳴いたさび色の鷹は、高々度で翼をたたみ、急角度をとって降下した。狙いは崖に引っかかる静止した目標。弓矢のようにすっ飛んでいき、荷物の直前で翼を大きく広げて制動をかけると、その黒い爪で荷物を一撃した。荷物はぶわつと山肌から離れて崖底へ真つ逆さまに落ちていく格好だったが、鷹はとって返ってきて宙に浮いた荷物を爪で力強く掴み込む。そのあとは、ふわふわと翼を動かして緩やかに上昇、鴉子の所へと戻ってきた。

「ご苦労様。…はい、確かに」

巫女は荷物を受け取り、女へ手渡した。その間に鷹は道へ降り、再び煙を噴き出して浪人の形をとった。その時、女の目に一瞬だけ、焦げ茶と黒の混ざったふさふさとした獣の尻尾が見えてしまった。

狸だ。

「あの…あ、ありがとうございます。これで旅を続けることができます…」

「そりゃどうも」

マミヤの後ろからは尻尾が相変わらずふらふらと自己顕示している。「狸で悪かったな」という不満を、精一杯ぶつけているようだった。

「では…ではこれで…」

引きつった笑いを作って、女はその場を後にした。それを見て満足したのか、マミヤは尻尾を消した。

「マミヤ。あの態度はないでしょ？」

「鴉子、文句はあの女人に言って下さい。あんですか、あの型にはめた様な挨拶！」

「普通は化ける狸なんて見たこともないでしょう。こういうときは我慢をして、愛想でも良いから笑って、相手を解きほぐすのです」

「むっ…わかりました」

「よろしい」

鴉子は、柔らかな口調と無表情で、マミヤをたしなめた。この化け狸は九十九神となつてまだ日が浅く、普通の人間と付き合うという事が苦手である。ただ、経験が豊富なのと好奇心がネコにも勝るとも劣らないため、化けが上手く早い。そのせいか色々悪さをしていた所を鴉子に調伏され、罪滅ぼしの一環としてこうして彼女に付き従っているのである。

さて、二人は北海道峠の道をぐねぐねと歩き続けた。ちらほらと向こうから旅人がやってきたり、ふんどし一丁の飛脚が、手紙や小荷物を入れた籠をしょってすれ違つていった。そのうち、目の前の景色に鎮座していた山々が低くなり、深い青を湛えた湖が眼下に広がった。

「あれが白貝湖ですか」

「そう。あのへんに宿場があるけど、反対側のほとりに神社がある

の。今日はそこでお宿をもらいましょう」

鴛子は遠望する湖の左端を指さしたが、それを見ていた二人の顔がにわかには曇った。丁度、神社があると言った地点が、山肌から流れてきたような赤黒い何かに覆われており、その一帯をべちゃりと塗りつぶしたようになっていた。

「…山崩れかしら」

「みたいですね。ひとつ飛びして見てきますか？」

「いいえ。あれは土師宮山ね。少し急ぎましょう」

急ぐと言っても、人間の脚は相当の努力をしなければ転がる石にも負ける。左手に遠望できる湖周辺の様子を見て、二人の四本脚はさくさくと、自然と忙しく動き出した。

神社へ続く道は、泥と岩石、土と倒木でひどい有様だった。赤茶色の絵の具が、道ばたで春を待つて眠っているタンポポの葉にべつとりとこびりついている。長い間人や牛、馬によって踏みならされた道は、山の泥によって生活の匂いを流され、忘れかけていた自然を取り戻し、還ろうとしている。

「こりゃあ…人は無理そうですね」

「水神様が心配ね…」

「四つ足なら行けますよ。見てきますが」

「危ないから良いわ…仕方がないから、宿で空いているところを探しましょう」

来た道を途中まで戻り、北往道に沿って再び少し歩くと、白貝湖畔の宿場町、白貝の宿の入り口があった。

「ここで待ってて下さい。ひとつ走りして宿を探してきますんで」

「ありがとう」

ぱたぱたと砂煙を上げて、マミヤは町の中央を貫く道を駆けていく。その後ろ姿が見えなくなると、鴛子はくるりと辺りを見回した。今彼女が座っているのは入り口にある休み処の長椅子で、隣ではのぼりがそよ風に吹かれている。

「いらつしやい」

奥の台所から主人とおぼしき老人が出てきて、盆に載った二つの湯飲みを差し出すように長椅子に置いた。

「おや、お連れさんは…」

「ごめんなさい。お宿を探しにいつて貰っているのです。その間こちらで休ませて頂けません？」

「ええ、ええ。構いませんよ。失礼ですが、どこかの神社に仕える方ですか？」

「はい。北海道の向こうにある、黒井^{くろい}神社の者です」

「ああ。黒井さまの…。その白貝水神さまをおたずねですか？」

「いえ、残念ながら。中央府神宮に報告に上がる途中なのです。水神さまの社でお宿を頂こうと思つたのですが…」

「ああ、土師宮山の山崩れで行けなかつたでしょう」

鴉子は頷いた。

「だいぶ前に崩れたんですがね、名主様が片づけるなど言つてねえ…その罰が当たつたのか、ここ最近魚があまり捕れなくて」

「まあ…」

「確かに、都へ納める品も間に合わせないと…下手をすれば首が飛ぶからね！でも私らはそれよりも祟りが怖いよ。巫女さま、無理にとは言いませんがせめて、白貝さまをお慰めになつて貰えませんかね…」

しばし、鴉子は考えた。どうも遠くから見るとよりも深刻な事態が発生しているらしかつた。だが、ここは『白貝水神』の護る場所。普段から護られている住民の彼らが普段の恩を返すためにも自発的に動かなければならない。それが無いというこの状況に対する神罰が行われているのであれば、自分のような、神に仕える者としては末端に近い者が出しゃばるべきではない。…だが、それは理由があつて動けないのだから、それを水神さまにお伝えすれば、それなりの応答があるかもしれない。

「ここを発つ前に、お訪ねしてみます」

「ああ良かった！今まで普通にあった物が不在の状態がいつまでも続くって、嫌ですからねえ…。貝焼きなど、お食べになりますか？いえ、ぜひ食べていって下さい」

鴉子の返事も聞かず、店の主人は台所へと向かっていった。

別に彼女は欲や食物を禁じられているわけでもなく、相応しくないとはいわけてではない。だから何も控える事は無いのだ。

しばらくすると、貝肉の焼ける独特な香りと、肉汁がわき出す音が耳に入ってきた。この、淡水で一生を過ごす『オオシロシジミ』は、海で取れるハマグリと同じくらいの大きさではあるが、出汁の良く出る身を持っているためこの辺で多く食べられるという。

「はい、おまちどうさま」

ごま豆腐のような灰白色の皿に載ってやってきた三つの貝の身を見て、鴉子はびっくりした。大きい。ハマグリより大きい、淡いえんじ色の身がじゅわじゅわと肉汁を出し、皿の上に鎮座していた。殻をはぎ取られても示されるその存在感に、鴉子は圧倒された。香りはさほどでもないが、あふれる肉汁を見たときからすでに、彼女の口内は唾であふれかえっていた。

「……………」

鴉子は両手を合わせ、神が与えてくれた巡り合わせに感謝した。

そして、自分が今許されているささやかな贅沢の中心となっている貝三匹に祈った。

「いただきます」

鴉子は竹の箸を左でとり、三つのうちで最も小さい（どれも同じ大きさに見えるが、彼女にとっては小さいと見えた）ほうをつまみ醤油の入った小皿へちよつとだけのせ、すぐに引き上げて口の中へ入れた。奥歯で貝肉をかみしめた瞬間口の中に、まだグラグラとたぎっているのではないかと思えるほど熱い出汁が噴き出し、思わず飛び上がった。

「んーっ！」

懸命に奥歯で巨大なシジミをかみ砕き、味わうのも早々に飲み下

してしまつた。惜しいと思いつつ、口の中に残る醤油と出汁の混ざり合つた味を楽しんだ。口腔から鼻に突き抜けるその味は、僅かに鉄のような味を含み、それも風情として楽しめる。醤油で塩味を補い、そこへ出汁を合わせた、いわば食べる吸い物のようだ。

鴛子は再び挑戦する。今度は醤油についてきたわさびを載せてみた。食べる。やはり熱い汁が流れ出てくるが、今度はさほどでもない。口が慣れたのか貝が冷めたのか詮索するよりも前に、彼女は先に出汁を飲み込んだ。喉を熱い吸い物のような液体が通りすぎると口に残つた身をもぐもぐと咀嚼した。普通、シジミは小さくて身も貧弱だと覚えるが、この貝は違つた。ハマグリよりも弾力があるその身は引き締まつていて、シャキツという歯ごたえを持つていた。

「これは…手強いわあ…」

もぐもぐやると、こめかみがびくびくと動く。載せたわさびがジーンと鼻に抜けた頃には、貝は胃の中へ消えてしまつていた。ここで、鴛子は気付いた。いくら噛んでも貝を食べたときに付きものの砂を噛むという事が無いのだ。よほど上手く砂抜きしているか、身を洗つているのか…。

「美味しい！」

台所から見えていた主人はニコニコ笑つていた。鴛子の笑顔を見ると、誰でも顔を綻ばせるのだろうか。

(これは良い。マミヤにも食べさせてあげましょう)

鴛子は、

「おじさん、さっきの連れの為にもう一串下さい。お代は払いますので」

と声を挙げる。主人はガッテンという感じで相づちをうつと、再び台所へ引つ込んでいった。そして彼女は最後の一個を口に入れ、出汁と肉を同時に愉しみだした。砕けた貝肉が噴き出る肉汁に揺すられ、口蓋と舌をなでながら食道を下つていく。そしてわさびのかすかな刺激。

「ご主人！」

とろけた空気に身をゆだねていた鴉子は、マミヤの声によって現実世界へ引き戻された。

「宿が見つかりましたよ！ほらよだれが出てますよ、早く行きましょう」

マミヤの忠告を聞いて、鴉子は口角のあたりを指で触れてみた。緑茶による潤い以外は何も感じない。おそらく、彼女の恍惚とした表情を遠くから見つけた事からの悪戯だろう。

「ほら早く！」

マミヤは鴉子の腕を引つ張ろうとした。

「ちよつとまって！まだお勘定が…」

「おじさんオアイソ！」

「あなたも食べたなら？一本焼いて貰ってるの」

「何言ってるんです！今駆け込まないと埋まっちゃいますよ！

はい、二本分！」

財布を袖口から引つ張り出し、中を引つかき回して銅銭を数枚出したマミヤは、それを椅子の上にベチンと置いた。そして鴉子を引つ張っていつてしまった。

「…そそつかしいお連れさんだなあ…」

「ちよ、ちよつとまって！脚がもつれて…」

「すぐそこです！」

マミヤは鴉子を引つ張り旅籠へ一直線に走る。そして旅籠の軒下へ転がり込むように突進した。番台に座っていた旦那は何事かと思つて眼を丸くしてキセルを口から離し、二人の方を見ていた。

「部屋を借りたい。空いているか？」

「ええ…大丈夫ですよ」

「はは…良かった。間に合いましたよご主人」

「わざわざ私を呼んだ理由は…？先に予約しておけば良かったのに…！」

鴉子は息が上がっていた。

「あ……」

マミヤの様子に、鴉子はあきれかえった。

「あなたに必要なのは冷静さね！」

二人の様子が一段落したのを理解した旦那は、廊下の奥に向かつて女中を呼びつけ、桶を持ってくるように言った。鴉子は玄関の段差に腰を下ろしてワラジを解き、白い足袋を脱ぐ。そこへお湯の入った足おけを持った女中が現れ、桶を足の下へ持っていき、道中の砂などもみ洗いしていった。

二階の部屋は質素なものだった。床の間も何も無い、ただの箱といても良い部屋だった。唯一、若々しい緑色の畳から香るい草の匂いが、二人に極上のもてなしを行っている。

「良い部屋ねえ」

マミヤは鴉子の後ろで、うやうやしくふすまを閉めている。それを尻目に鴉子は窓辺へ進み、障子をさつと引いた。白貝湖が一望できる、すばらしい眺めが広がっている。そして眼下には漁村が広がり、その屋根には一杯の白い貝殻が並んで干されていた。屋根一面に広がる貝殻は、夕日を浴びて若干の橙を呈しており、蜜柑の皮のようだった。これが夏日の昼間だと、おそらく眩しいくらいに白く輝いている事だろう。

「うん。あれが胡粉こふんになるのね」

「なんです？」

一緒に眺めていたマミヤが聞いた。

「白色の顔料よ。ああいう白い貝殻を長い間干しているとそのうち崩れて粉になる。それを顔料にするのよ。オオシロシジミの貝殻は大きいし白いから、この辺は胡粉の一大産地なの」

「はあ……」

「食べてよし、見てよし。まさに水神さまが与えてくれた恵みね」

しばし、二人は夕暮れの白貝湖一帯を眺め、心をゆだねた。歩き続けて疲れが出始めたのか、二人とも若干うとうととしているようだった。

「一階に風呂場があるそうです。先にお入りになってはどうです」
「ううん。少しここで静かにしていきたい…。あなたが先に入ってきたら?」
「ではお言葉に甘えて」
「ええ」

第二章 銀狐

風呂場には誰もいなかった。冷えた身体を温めるため、先客達は

早々に済ませてしまったのだろう。最後に入ってきた自分たちの独占だ　　と思うと、マミヤは気分が良かった。そうとくれば遠慮はいらぬ　　という感じで尻尾を現すと、身体の周りから煙がわき上がり、マミヤはあつという間に茶色い毛むくじやらの獣になった。丸い顔に尖った口吻。丸く、正面を向いた耳がひくひくと動いていた。エノコログサのようなふさふさした尻尾をふらふらと振った。

（やれやれ結構疲れるもんだね…）

後ろ足で立ち上がった狸は器用に木戸を開け、中に誰もいないことを再確認する。さつと滑り込み木戸を閉めると、指を打ち鳴らした。頭に薄茶の手ぬぐいが現れる。にやつと笑った彼は、隅っこに重ねられている桶を持ち上げ、浴槽のお湯をくみ上げた。彼はその中へ身体を漬け込むようにして入り、手ぬぐいでガシガシと洗い始めた。

「あ…いけね。石けんがねえや」

マミヤにも、化かす事ができないものがある。いわゆる、彼が道理を理解できないものは不可能なのだ。鳥や人などの動物は生態などを観察していれば自然と化けが身に付くのだが、静物…とりわけ不思議なものは理解の範疇を越えてしまう。石けんもその一つで、どうしてもあの泡の正体が突き止められないようだ。

きよろきよろとドングリまなこで辺りを見回しても、石けんは無い。貴重品である事は分かっているが、ここは公共の宿。ちゃんと補充をしてくれよと、彼の眉間には一層毛が集まった。仕方がないので、しつこくジャブジャブ洗うことにした。肉球の間も爪の先まで、手ぬぐいで磨き上げる。ここまで潔癖なけだものも珍しいだろうというぐらいだ。

「それっ！」

湯船に飛び込むマミヤ。湯気の立つ水面に尻から突っ込み、ざんぶと飛沫が上がる。少しばかり姿が見えなくなったが、すぐに丸い頭が現れ、湯船の中で犬かきを始めた。

（やあー、暖かくていいなこりゃ。これだから人間共に混じるのは

辞められない)

一通りはしゃいだのち、マミヤは頭に手ぬぐいを載せ湯船の縁にあごを載せ、ぐったりと水面に浮かんだ。

(ああ…。そういえば夕飯何が出るのかな。前の宿はひどかったなあ…。ここは湖も近いし漁村もあったし、期待できそうだな。ウナギ、ナマズ、フナ、コイ…えへへ)

食べ物の事をしばらく、ニヤニヤ考えているうちに、木戸の向こうがゴトリと鳴った。

「マミヤ？居るの？」

「はい！交代しましょうか」

「まだ入ったばかりなら良いわ」

「いえ。十分ですよ。そこで待ってて下さいな」

「ありがとうございます」

マミヤは湯船から飛び出した。ぶるぶると身体を揺すり、毛に付いた水をはじき出すと、からっとした元の毛皮に戻った。そして木戸を開ける。そこには鴉子が立っていた。

「かわいい狸さんね。どこから来たのかしら」

煙がわき上がり、着物を着た浪人が現れる。

「中に石けんはありませんよ、鴉子」

「持ってきてる」

「用意が良い。夕食は部屋ですよ？番頭に言っておきます」

「ええ。お酒は結構と伝えておいて。あ。あなたは良いわよ」

「じゅっくり」

部屋に戻った二人は並べられた料理を見て拍子抜けした。マミヤに至っては愕然とした。出汁のきいた茶飯、シジミの吸い物、お新香までは良い。だがおかずに入ったのはやせ細ったナマズの天ぷらと野菜の天ぷらがいくつかだった。まだ、隣の小鉢に入っている、訳の分からない雑魚の佃煮のほっが見栄えしているほどのナマズだ。

「そんなあ…」

思わず口から漏れてしまった言葉を、鶉子は諫めなかった。黙って手を合わせ「いただきます」と言うと、汁を飲み、シトウの天ぷらを頂き始めた。

(そうですね…。バチが当たりますよね…)

マミヤは汁の入った椀をもち、口にした。オオシロシジミの巨大な身が、ぷかりぷかりと漆器の底で揺れている。臭いも癖もない淡泊な味わいの汁に、たっぷりの三つ葉がささやかに嬉しかった。

鶉子に倣い、シトウを最初に食べてみることにした。天つゆにちやぶつと浸し、一口で平らげる。青臭く、僅かに苦みのある汁がごま油と共にしみ出てくる。美味しい。茶飯を口に放り込み、佃煮をばいばいと放り込んだのちに、マミヤはしばし考えた。ナマズの天ぷらの処遇だ。一体、どう料理してくれよう(すでに料理されているのだが)。明らかに今夕の主役であるはずの湖のどう猛な仙人は今、目の前で頭を落とされた情けない姿を晒している。その体躯の未熟さも相まってさらに惨めに見えるほどだ。アユほどの大きさもないのではないか。しかも一人一尾。

(いやいや。腐ってもタイ、小さくてもナマズ)

マミヤはそう自分に言い聞かせ、黄金の衣から覗く白身を口の中へ入れ込んだ。まず最初の一嚼みで、軽快な衣が破ける音とともに、エビやキスとは全く違う歯ごたえが歯に伝わった。海で育つ魚とは違う、柔らかで淡泊な身。同じ淡水魚であるウナギとも違う、落ちて着いた食感である。小さいナマズではあったがそれでも、湖底にて虚ろで据わった眼を動かし、獲物を瞬間的に捕らえるどう猛な者にふさわしい味を示された思いだった。

二人は食事を一通り愉しみ(特に、マミヤの後にナマズを食した鶉子の感激っぷりといったら!)、夜の静かなひとときを過ごした。腹は満たされ、喉の渇きもない。足の疲労は徐々に抜けつつあり、明日の旅程もこなせることだろう。すると、階下の部屋が賑やかになっていることに気付いた。どうやら隣の部屋の者を招いて宴会を始めたらしい。

「…明日は白貝水神さまへなんとでもたどり着かなくては」
そう切り出した鴉子に、マミヤは何故、という表情をした。

「ちよっとね。休み処のおじいさんに頼まれたの」

「やっぱり。山崩れで何かあったんですね」

「そう思うのが妥当ね。そして私達はその重大さを今、身をもって感じてる」

「…ナマズですか？」

「それも含めてね。佃煮の小魚を見た？やせ細って…栄養が良くな
いんだわ」

「鴉子。それだったらこの宿場を仕切る者に会った方が良いでしょう。
怒ってる神様の前に変に出しゃばって、とぼっち喰らうのはごめ
んです」

「言い方は良くないけど…ううん、確かにそうね。少しここに長く
居ることになりそう」

「そうと来れば、今夜はもうお休みしましょう。…お布団を取って
きますね」

「ええ」

半刻（一時間）ほどで、二人は眠りについた。夜空にはぷっかり
と月が昇り、障子を通して月明かりが部屋中に差し込んでいた。窓
辺にはマミヤがあぐらを掻いたまま頭を垂れて眠り、その向かい側
に敷いてある布団に鴉子が床についていた。寝息一つ立てず、二人
とも泥のように眠っていた。

「…マミヤ、起きてる？」

丁度、日付が代わろうとした時頃、唐突に鴉子が声を掛けてきた。

「ええ」

「…何か来てる」

「窓縁にいます。もう四半刻もろろろしています 何故分かっ
たんです？」

「僅かな神気を感じる。でも、ここの水神さまではないわ」

「…のぞきが趣味の神様なんて居ませんよ。今すぐにも蹴散らしてやりませんが」

「やめて頂戴。少し、様子を見ましよう」

二人は月の僅かな光りの中で、相手に気取られないよう小さな声をかけあつた。

気配の主は意を決したかのように窓に近づく。次第にひたりひたりと、欄干を歩く音が二人の耳に入ってきた。四つの足で、忍び寄るといふよりも、暗い中で細い欄干を歩く慎重さがふさわしい足音だった。

マミヤは、抱え込んでいる脇差しに手を掛け、バチリと鯉口をきつた。丸いドングリ眼は昏間とはうってかわつて真剣そのもので、暗がりでも良く見えるよう黒目が広がっていた。

気配はしらずと欄干を伝つて、とうとう障子の向こうにまでやってきた。月明かりに照らされた影を見た鴝子は、神気の意味が判つた気がした。四本の足、動物の時のマミヤよりも若干細くきゅっとしまった身体、毛筆のように先端が絞り込まれた尻尾、そして極めつけの三角耳。狐らしい。

影の主は欄干の上に座り込み、障子の向こうからこちらを観察しているかのようだった。マミヤの緊張は鴝子とは違い最高潮に達しており、今にでも影を刀で一串にしそうな勢이었다。

「…すでに起きていますようだが。要求すべくはこの障子を開き、我を中に入れよ」

影の声は障子突き抜けるようにしてハッキリと二人の耳へ入ってきた。若いが、マミヤとは反対に落ち着き払った声質である。可否を考慮させないその断じるような物言いは、マミヤの耳に障った。「《要求すべく》わあ？分かつてるんだらうな。すぐにでもお前をきつねそばの具にしてやるんだぜ」

「…狸の妖魅の分際で、我に無礼を働くとはな」

「しゃらくせえ」

「おやめなさいマミヤ。その神気、この周辺を護る御神様のも

のとお見受けします。…私は北方を鎮守いたしますくろいどのみこと黒井戸之命に仕える巫女、黒井鴎子と申します。これはマミヤ、神命により私を護るよう仕えている者です」

「 我は土師之宮山神に仕える者、土師宮狐衛こえいと申す。ここを開けよ。鴎子殿にお願いあり、参った」

マミヤが口を開き、また何か悪態をつこうとしたのを見て鴎子は障子を開けるよう促した。緊張を無駄に感じたことと、人に物を頼む事を知らない常識知らずに対しての不満から、彼は刀の石突きで障子の枠をけつ飛ばして開けた。その直後、真っ白な狐が部屋に躍り込み、畳の上に静かに座り込んだ。

見事な銀狐である。座るとマミヤの腰辺りまでの大きさで、月明かりに照らされることによって艶のある白い毛がキラキラと銀系のように煌めいた。前足は細く、先端までも艶のある銀系で覆われており、黒い爪がそれぞれの肉球から鋭く飛び出していた。先ほどの毛筆のような尻尾は間近で見ると一層見事で端正のとれた形をしており、ゆらゆらと気まぐれに揺れていた。正面から対峙すると狐の顔は冷淡の一言に尽きる。どこか暗い部分のある細く長い顔は、狸のような愛嬌のある顔とは全く違う。そして狐衛と呼ばれるその狐がさらに寒々しく感じる原因となっているのは、その双眸だった。青い、鯖の背のように青い瞳が、神気を帯びて淡く光っている。

鴎子は思った。おそらく、今彼が見ている世界は、通常見える世界とは全く違った汚れた様子を呈しているのかも知れないと。彼がまとっている神気が、彼の身体に対する慣れの様相を示していないからだった。

「 神の使いを見るのが、そんなに珍しいのか？黒井戸の巫女よ」
鴎子は知らないうちに、狐衛の煌めく双眸に心を奪われているように、はっと我に返った。

「 いえ……。あなたは土師宮様のお使いなのですね？もしま、あの山崩れと関係があるお話ですか？」

狐衛の青眼がより大きく見開いたようだった。

「話早い。その通りである。…ぜひ我が御神さまの手となり足となり、あの死に瀕する湖を救うため力を貸してほしい」

「水神さまはお怒りではないのですか？」

狐衛は目を閉じ、首を横に振った。

「一年ほど前、大嵐によって引き起こされた山崩れが襲った所に、白貝水神の社があった。社は流され、納められていた神体も行方が分からなくなり白貝湖は事実的な無防備の状態となってしまう。その後湖の一角で水の花が多く見られるようになり、異臭を放つようになっちゃった…」

「昼間、その窓辺から見た限りではそんなことはありませんが」

「左様。水の花や異臭騒ぎはすぐに収まり、静観していた我らも胸をなで下ろしたものだ。かねてから人間が行っていた貝の養殖も上手くいっているようで、普通よりも大きなオオシロシジミが採れたようだ。しかし、最近は貝以外の魚介水揚げが著しく減少しているらしいのだ」

「単に採りすぎってわけじゃないのか」
「ママヤが口を挟んだ。」

「平年通り漁を行っているのに魚ばかりが減り続けている。ここ最近で起きた大きな変化は、わが土師宮山の山崩れのみ。どう考えても原因があれにあるとしか思えないのだ」

「水神さまの眷属の方が、何か対策をしているのでは」

鴉子の質問に、狐衛は首をふった。

「何も。神体に何かあり、眷属を眷属たらしめていた神気が失われちゃったと思われる。だから、私が使わされたのだ」

「山崩れの原因はなんなんだ」

「…破壊的な伐採だ。そのせいで、山肌は非常にもろくなっちゃった。我々に、人間の活動へ積極的に干渉するという事は望まれていない。むしろ避けると言われている。彼らに強く望まれたとき、動くのが我らの使命なのだ」

「へっ。それで水神さまの救出もせず、今の今までぼーっと見てい

たわけだ」

「ママヤ……」

「…その妖魅の言っていることも一理ある。だから、今私はここに居るのだ。土師之宮山神さまは土師宮山を越えた隣国に祀られている。こちらの国では力をふるうことは出来ないのだ」

「我々も昼間、町の者から頼まれて水神さまと名主を訪ねようと考えていたところです。この辺の土地に詳しいあなた様に案内して頂ければこれほど心強いものはありません」

「我の願いを頼めるのか？」

「ええ、もちろん」

「ご主人…？」

「仕える神は異なるとも、隣人として助け合わなければなりません」

「でも…それだけ中央府へ到着するのが遅れることになりますよ」

「その心配はいらない。到着が遅れた場合には、われが土師之宮を代表して先方へ状況を説明し、便宜を図って貰えるようにしよう」

「お気遣い感謝します」

「…では、この土地の名主を訪ねてみましょう。信心のない者だとしても、説明すれば耳を貸すかも知れません」

「人間との仲介をしてくれるのなら、非常に助かる」

第三章 接敵

さわやかな朝だった。その後遅くまで人間一人と獣二匹は話しをしていたが、身体に疲れが残っている感じはなかった。

「私の神気のせいだろう」

「ご飯茶碗にたっぷりよそわれている玄米を頼張る鶉子の正面で、

狐衛は説明した。

「山神さまより預かりしこの神気は、恥ずかしながら私には身に余る…。それが漏れ出でて、周りの者を癒すのだ」

「素敵ですわ」

銀狐の青い眼が細くなり、閉じたかのように見えた。

「精進せねばならぬ」

「あなたは変化できないのか？言っちゃ悪いが、その白っちい毛並みじゃ目立つぞ」

ママヤがアジの干物をぐしぐしと骨から身を外し、大きい欠片を口に運びながら喋る。

「…私は変化を得意としない。言い訳をするつもりはないが、まだ仕えて年月が浅いため、このように人間に出会って話をする以外の裁量は与えられていないのだ」

「…ふうん…」

湯気の立つ赤みそのみそ汁をずつと啜りながら、ママヤは狐衛に親近感を得た。方や神に直接仕える由緒正しき者、それに比べて彼は調伏された者。比べられないほどに身分の性質が違うのだが、つい最近までは狐に対してなんとない敵対心を持っていた彼にしてみれば、大きな発見であり進歩だった。

「だが鴉子どのと行動を共にしていれば、違和感はないと思うが」

「いやいや。そんな事はないと思うぞそれこそ…」

「威厳のある狐衛さまに付いていて貰えば、どんな人だって話は聞いて貰えると思うの。そんなに重大な問題ではないわ」

「うーん…まあ…そうですね…」

ママヤはアジを綺麗にばらし、ネコも嘗める場所が無いぐらいさっぱりとした骨にした。ネギと油揚げの入ったみそ汁を飲み干し、玄米の飯も綺麗に平らげた。

「さて、今日はやるのが沢山あるわ。支度を終えたら名主様の所へ参りましょう」

二人と一匹は身支度を調べると旅籠を出、北道峠から続いている

町の通りを出口側へ歩いていった。不漁が続いているという雰囲気は全く見えない。旅人や暇をしている人間が町中を行き来している。茶屋や他の旅籠の間口では、その旅人が休みをとっている。

「昨日もそうでしたけど、それほど危機感を感じていないのは何故なのでしょう」

鴉子は不思議そうにいった。それも当然のことだろう。

「心のどこかに余裕があるからだ。…それに食べ物も魚だけではなく、不漁が続くのも今が初めてではない。ほとんどは、名主に影響されて…なのだろうがな」

「臭えな。いくら人間でもそこまで鈍くないだろ」

一行が歩を進めていくと、何人かの町人や旅人、漁師が手を合わせて拝んでいるのに気がきた。やはり銀狐の狐衛は目立つのだろう。おまけに傍らには巫女がいるのだし、どこかの神社の催し物と思われるも仕方がない。

「あら、あら…」

「…そのうちいなり寿司が出てくる前に、行きましょう」

マミヤに急かされ、鴉子と狐衛は早足になった。

百米ほど行ったところで、白漆喰で綺麗に化粧された塀が現れた。それが渋を塗られた木造の建物と、色調だけではない明暗を成していた。

「ここか…塀が立派だ」

「胡粉の仲買もやっているそうだ。門はこつちだ」

塀の向こうから道をゆく通行人を見下ろすようにたたずむ蔵を見ながら、二人は狐衛に先導されて門に向かう。塀と同じく立派な四脚一間一戸の門前に立つと、鴉子はきよきよと目を動かし始めた。別にその門構えを観察して、感心しているようではなさそうだ。

「ご主人？」

「…なんでもない。マミヤ、お願い」

鴉子に促され、マミヤは一步前へ出、門扉を叩いた。

「こんなに大きい門を、昼間から閉じて…」

「用心深いのだろう。…気心の知れた町民なのにな」

すると、門扉に小さく取り付けられた扉が内側から開く音がした。狐衛はなるべく目立たないように鴛子の斜め後ろへ下がって座った。

「…なんだい？あんたらは」

小さな扉から下男とおぼしき若い男の顔が覗き、マミヤと鴛子を見比べるように観察した。

「北より参りました。こちらの水神さまのお社が嵐の被害に遭ったと、宿で聞きました。そのことで名主様とお話しがしたいのです。

どうか合わせて頂けませんか？」

「…ちよつと待ちなせい」

下男は再び戸を閉め、屋敷の奥へ引つ込む足音が遠のいていった。「…ひどい匂いだ」

狐衛は前足の狼爪で鼻をこするようになった。よほど鼻に障ったのだろう。だが、マミヤには全く見当が着かなかった。

「何のことだ？」

「妖気が噴き出したのよ。その戸口からね」

鴛子も、少し顔をしかめていた。こちらは鼻にきたというよりも、身体が水をかぶったという感じた。

「…あまり良い予感はいねえな…」

「出来るだけ感じは良く、ね。煙たい顔は作らないこと」

「それはこっちの言う言葉ですぜ、ご主人…」

「そもそも入れるかどうかも怪しくなった。妖鬼が潜んでいるとなると屋敷の者に取り憑いているだろう。我々を迎え入れるのを断固拒否するだろうな」

「だったらなおさらだ。頭ひっぱたいて正気に戻さないとな」

ボソボソと人間達と獣が喋っていると、意外にも戸口が再び開き、先ほどの下男が顔を出した。

「旦那様がお会いになると申された。だが、そっちの巫女さんだけだぞうだ」

それに一番に反応したのはマミヤだった。

「冗談じゃねえ！」

（マミヤ！）

鴉子は声を押し殺しながら、マミヤをしっかりとつけた。

（誰が敵陣に味方を置いていきますか？ご主人に何かあったら、わたしや神主さまにたたき殺されて、狸汁にされちまいますよ！）

（大丈夫。あなたが危惧しているような事にはなりません）

（しかし…）

「しかしも駄菓子もありません。分かりました。では、案内をお願いします」

下男は一層卑屈になった感じで頭を下げると、鴉子を招き入れた。二人は戸口の向こうへと消え、再び鍵ががっちり掛けられた音がすると、二つの足音が遠ざかっていった。

「ああ…」

マミヤは悲壮な表情を浮かべている。

「…おい狐さんよ。俺はもう覚悟したよ。だからもしもの時は、せめてご主人の骨を拾う手伝いはしてくれよ」

「急に弱気になったな。主の神力を信じていないのか」

「大駒だけで将棋は出来ないだろ」

「…言ってる意味は理解しかねるが、心配するな。察するに鴉子殿はかなり気の強い人間と見える。そのことを一番良く知っているのは、直に調伏されたというお前だろう」

「…言い方はなんか引つかかるが、まあそつだ」

「なら黙って待っておれ」

狐衛はそう言うと、ふんと黒い鼻を鳴らして、門の向こう側を見ているかのような視線を作り、ふせの姿勢をとった。

（…狸汁になる時や、お前も狐汁にして道連れにしてやる）

マミヤはじつとりとした視線を、狐衛の白い毛並みの頭へ注いだ。

下男に導かれ、鴉子は玉砂利の上に浮かぶ踏み石を歩いていった。

庭園は綺麗に整えられている。灌木は丸い大福のような体を成し、松の幹は水墨が半紙の上を風に吹かれて伸びたような、そして上から押さえつけられて抑圧されたような感じで立っていた。個性のない風景だった。狐憑きやその他悪霊騒ぎで何度も地主やその他田舎の金持ち屋敷へ出向いたことがあったが、そこで見てきたような庭園が目の前にあった。彼女にとって、どんなに哲学や思想を取り入れ昇華させたところで、それはただの庭であり、いくつかの石や木の位置をひっくり返しただけにしか見えないのだ。その美的感覚の欠損もあるが、さらに彼女の思考を偏らせているものがあった。一歩進むたびに強まる、神気を帯びた者を拒絶するような邪気。そしてかすかなすえた匂い。耐えられないわけではない。だが、この灰色の気に一瞬にして当てられたこの家の者達はすでに正気では無いのだらう。どこか、常人と違って思考が鈍い。そして庭園の草木も、雑草さえもが苦しんでいるように感じられた。

（私も同じだ。邪気を散らすのは簡単だが、それで逆上されたら困る）

「こちらでございます」

下男が案内したのは庭園の隅にある庵だった。人工の小さな川が前を流れ、傍らには屋根に枝を差し出すようにして桜の木が立っている。その桜の木は寒気が邪気かのどちらかに当てられて、元気が無いように見えた。

かすかに、茶の香りがした。良い茶だ。僅かに甘い匂いがする。

「旦那様、お連れしました」

「うむ。入って貰え」

下男は鴛子に「お入りなさい」と合図した。先ほどの下男の卑屈な態度には嫌気がさしていた鴛子は、半ば無視する感じで「ぐいっ」と前へ出でて庵へ上がった。

「失礼します」

鴛子はそう言って障子を引いた。

庵の中では壮年の男が一人、正座をして茶釜の前に座っていた。

その目は閉じられていたが、鴛子のほうへ静かに顔を向けて目を開いた。

「…黒井神社より参りました。鴛子と申します」

「ようこそいらっしやいましたな。私はこの辺りの特産物の仲介をしている久佐長衛門と言います。…さあこちらへ」

長衛門に勧められ、鴛子は畳へ上がった。

「お前はあっちへ行つていなさい。　ああ、珍しいお菓子があつたね。それを持ってきなさい」

下男は一層卑屈なお辞儀をして、屋敷のほうへ去っていった。

「さてと…今日は何のご用でしたかな」

近衛門は茶釜のお湯をちゃぷりと掬い、湯気を観察すると、満足したかのよう微笑んだ。

「白貝水神の祠はご存じですか。今は土師宮山の土砂崩れで流されてしまいました…」

「ええ。ええ、存じてます。それがどうかしましたか…?」

茶碗が二つ、取り出される。どちらも釉薬をしつかりと塗られており、硝子質特有の、ぺったりとした輝きを放っている。一方はボケ珊瑚のような淡い紅色をしていて、白い釉薬のしたたりが、より淡さを引き立てている。もう一方は鋼のように黒光りしている。飲み口がゴツゴツと整えられていないため珊瑚色の茶碗に比べて飲みにくそうだが、何かを語りかけてくるような表情を感じる。

鴛子は、長衛門から発せられるあらゆる気を精査した。どれも普通の人間のものだ。ただ一つだけ、庭に漂うそれよりも強い邪気の「残り香」のような物を感じていたが。

(…つまり取り憑いては居ないのね。この人は元々神や信心というものとは無関係で、興味もない。何もしないというのは、この男が妖鬼の吐息に当てられているから…)

「私はあの祠をぜひ再建したいという町民を代表してここへ来たのです」

「それはそれは…結構な事ですね。しかし、わしはそう言う物には

とんと…」

「興味が無い、というわけですね」

「…そういう事です」

小さな茶筒が開けられる。中には鮮やかな青色を放つ抹茶が詰まっていた。それを茶さじで数杯すくい取り、茶碗へ入れた。

「不思議だ。多少魚が捕れなくなっただぐらいで、あんな鏡しか入っていない祠の祟りなんだと言う。また来年には元通りになるだろうに」

「確かにそうかもしれませんがね。…しかし彼らに必要なのは将来の安心ではありません。今の平穏なのですよ」

「…それで？一体わしにどうしろと」

「お金を抛出して頂きたいとは申しませんわ。ただ、祠を新しく建てた時には祭事を行います。その時の祝言をお願いしとってくださいます」

長衛門の顔に、さつと影が降りたように見えた。それはそうだ。

この男を取り巻いている妖鬼の吐息は屋敷の敷地内でしか効力を発さない。門の外へ出たら正気に戻ってしまう。それに、神を祀る場に妖鬼が居合わずなどという事は自らの存在の消滅を意味する。

障子の向こうに下男がやってきて、茶菓子の用意ができたと言い、戸を開けた。盆の上には木の小皿にちよんと載った上菓子が一つずつ。一つは桜色、鶯色で彩られ丸くまとめられた練り物。天辺にはきんとんが小さく載っている。もう一つは確かに珍しかった。真っ白な四角い金つばのような石衣のような姿で、さながら目の打たれてないサイコロのようだった。

鴉子の目は、敵を目の前にしながらもその四角い立方に釘付けだった。もちろん食欲からくる注視である。

「…どちらが良いかな」

「その白い物を頂けませんか」

鴉子は迷いなく答えた。長衛門は抹茶が入っている珊瑚色の茶碗に湯を数杯注ぎ、茶筌でサリサリと茶を立て始めた。そして立

て終わった茶を鴉子に勧めた。

「頂きます」

ぐっと、緑色の濃いどろりとした液体を飲む。粉っぱさは無く、まったく良く立てられていた。そして上等な抹茶のさわやかな苦さで、鴉子の舌は先ほどの茶菓子を所望し出した。楊枝で白いサイコロをさつくり縦に切る。中は漉し餡・ずんだの二段重ねになっている。そのずんだの層の真ん中に、きんとんの鞠がうずまるようにして潜伏していた。

「あら面白い。…春を待ちわびる福寿草といった感じかしら」

「なかなか想像力がおありのようですね」

「うふふ」

鴉子は抹茶で口直しをしながら微笑んだ。

「…祝言の事は考えておこう、結構だ。だがどうする？水神の神体は土砂の下だぞ。新しいのを祀るなんて、わしのような不信心者にも罰当たりと思えるような事はしないでくれよ」

見つけられる物か　という風に、にたりと笑う長衛門。それを見返すようにして、鴉子もにっかりと笑い返してやった。

「ご心配なく。早速、明日より町の皆様から復旧費用を募ってみましよう」

鴉子は最後の一かけを口へ放り込み、さらに抹茶を飲み干した。

「結構なおてまえで！」

門の前でマミヤは相変わらずそわそわしていた。その様子を横目で見ていた狐衛は、鬱陶しくてたまらないようだった。

その時、戸が開いて内側から鴉子が現れた。颯爽としたもので、ついでになにやら幸せそうな顔をしていた。

「殿方。お待たせいたしましたわ」

「何か成果があったのですか？」

「いいえ。お菓子とお茶を頂いて来たのです」

マミヤも狐衛も呆れかえった。

「…ご主人。それだけですか？」

「あと…そうね。御神体を探すために許可を頂いたわ」

「他には？久佐の者は皆、あやかしに取り憑かれていたりとか食われて取って代わっていたりとか…」

「いいえ。みんな毒気に当てられているだけ。屋敷を出てしまったら真人間に戻るでしょう」

「…何か変なことされたのでは…」

マミヤの質問攻めに鴉子が怒った。

「変なことって何。あなたらくでもないことを考えてるのかしら」

「違いますよ。…まいったな、本当にお茶して帰ってきただけなんです。一暴れでもするのかと待っていたんですよ」

狐衛の青い眼が、鴉子を射るように見ている。それに気付いた鴉子は付け加えた。

「ご心配なく。暴ればこっちに被害が来る。向こうが無茶すれば、それは自滅になる。今は微笑みと急接近で威嚇するだけで十分。それよりも御神体を取り戻せば良いのです。ただ心配なのが、どうも余裕綽々だということ。もしかしたら御神体に何かあったのかもしれません」

「縁起でもない…」

「まったくその通り。マミヤ。小舟を手配して頂戴。すぐに御神体を探しに行きましょう」

第四章 沈黙

一時のちに、二人と一匹は浜辺で舟を得ていた。

「マミヤ。漕いで頂戴。…さあ狐衛様もこちらへ」

「一体何をするのだ」

「陸から近づくのは殆ど不可能ときたら、対岸から近づくのが手軽でしょう。山が崩れた方向と反対側から調べていけばそのうち見つけられますわ」

「…見つけた後はどうするんです」

「それはその時考える。さあ！出して頂戴な」

鴉子は舟の真ん中に、狐衛は舳先に前足をかけて、そしてマミヤは船尾で漕ぎ手を務める。手慣れたもので、小さな舟はぐいぐいと進んでいく。風はそよそよと吹いているが湖面は静かなもので、櫂が水を切る時の動揺以外には揺れなかった。

狐衛は舳先から顔を出し、不安そうな面持ちで湖面を見た。透明度は高そうだが何も見えない。後ろを見ると鴉子は眼をつむって何かを探るかのように静かにしている。マミヤは口をへの字に固く結び、力一杯舟を動かしている。自然と船上は静かになり、さらに狐衛の不安を煽った。次第に落ち着かなくなっただのか、頭をきよるきよる動かして湖面を観察する。湖面は青空を反射して青く光っているが、今の彼にとってそれは何かを水中に隠しているかのようにしか見えなかった。暗闇でばったりと鏡を見つけた時のような感覚だ。狐衛の落ち着きのなさを見つけたマミヤは、声をかけた。

「おい狐さんよ。小さい舟なんだから頼むぜ、あんまり動かないでくれ」

「あ。ああ分かった…すまない」

数分経つと再びそわそわし出す。

「…あんた水が嫌いなのかよ」

「あの水銀のような鏡面が嫌なのだ。曇れば湖面は真っ暗だし…。おまけに山育ちだからこんなな岸から離れたのも初めてで」

「分かった。それ以上喋つてるとよけい気分が悪くなるぞ。眼をつむつてじつとしてな」

「お前も山育ちじゃないのか」

「残念。捕まる前は舟を盗んで池で魚とりして暮らしてたんでね。怖いのはカッパぐらいかな」

「カッパ！」

狐衛は頓狂な声を挙げた。水銀のような湖面という恐怖にさらなる味付けが成されてしまった。

「ああもう…。タデでも投げつけてやれよ」

きしきしと音を立てながら小舟は山崩れの現場へと近づいていった。狐衛も慣れてきたのか、再び舳先へ前足をかけて進行方向を睨みつけ出した。

山から流れ出した土砂はその下を横切るようにしている道を寸断し、さらに砂浜を塗り潰して突堤のようになっていた。水神の祠らしきものは見えず、構造物の破片すらも見かけなかった。

「なんてことだ…」

「ありゃひどいな。本当に湖の中に押し込められたのかもな」

「マミヤ。もっとよって頂戴」

「はい」

鴉子は相変わらず探るようにして眼を瞑っている。マミヤと狐衛はそれを邪魔しないように静かにしていた。

「…もう少し右…」

「御意」

櫂を小刻みに動かして船首を右へ向ける。

「すごく弱い…消えそう」

狐衛はぎくりとした。

「…この下ね。止めて頂戴」

「あの辺に祠があったんだ。と言うことは真つ直ぐここまで流されてきたという事だな」

狐衛は祠があったという場所を前足で指し示した。

「岸にはそう遠くないけど、結構な深さがあるわ。気配が弱いのもそのせいかもしれない」

「そうですね」

マミヤは湖面をのぞき込んで、言った。

「潜ってお助けにいかないよ」

「そうですね」

「誰か、泳げる者は？」

「そうですね…」

船上にしばしの沈黙が流れる。生返事ばかりしていたマミヤは湖面から顔を上げて鶉子の方を見た。すると、鶉子も狐衛もマミヤの方を見ていた。

「 じよ、冗談じゃないですよ！あたしや嫌ですよ」

「コイカナマズになって潜って来て頂戴」

「嫌です！春先だから寒くてたまないですよ！」

「魚を獲って生計を立ててたんだらう」

「世の中には漁具って物があるんだよ唐変木！そもそもお前が行けば良いじゃねえか」

「カナヅチだと言っただらう」

「ハ！」

「 あなたが行かないなら私が行くけど」

鶉子の発言に、マミヤは頭を抱えてしまった。

「なんでそうなるんです」

「カナヅチに強制は出来ないし、あなたはワガママだし…。寒いくらい何でもない」

「 分かりましたよ…行きますよ」

マミヤの体から煙が湧き出し、さび色のコイが船上に現れた。虚無的な眼がぎよろりと鶉子を睨みつける。

「湖へ投げ込んで下さい」

鴉子はコイを抱えると、水の中へ静かに放った。マミヤはぐるぐるっと泳ぎすると、湖底目指してゆつくりと潜りだした。

「見事なものだ」

「文句ばかりだけど、とても頼れる人なんですよ」

「元悪党に対して、かなり寛大ですな」

「よその人に怪我させたりしていませんし。それに、長いつきあいですから」

その頃マミヤは舟の真下目指し、ぐるぐると螺旋を描いて潜行していた。

湖水の透明度はなかなか高かった。船上から放たれた後も、小さくなって消えていくマミヤの姿が鴉子達にも見えただろう（二人はそんな事には気付かなかった）。

（随分と綺麗な水だなあ…。だがちよつと息苦しいな）

目の前にキラキラと光りが差し込むのが見え、一丈（三メートル）ほど先まで見渡せる。水温と相まって寒々しい光景だった。そのうち、なだらかな斜面が見えだした。松のような針状の葉を持つ藻など名も無き水草が繁茂し、さながら緑色の絨毯か森林のようだった。しかし、マミヤは妙な感覚に陥った。

（小魚が居ないな）

水草の茂みには小く中くらいの魚が集まり、そこに棲むエビなどを狙ったり隠れ家にしたりする。

そこまで水深が深くもなく日光も射すのに、生物の気配が全くない。代わりに、巨大なオオシロシジミがごろりといくつも転がっているのが見えた。

（こんな所にまで…。養殖場から流出したか）

マミヤは頭を山崩れの方向へ変え、湖底の林をかすめながら泳ぎだした。

何も居ない。狐衛の言ったとおり、自分たちが宿のお膳で感じた通りのようだ。目に付くような大きな魚が少なくなっているのは、

それに食われる小さな魚が居ないことにあるらしい。

その時丁度、林の上にピクリと動く透明な物があった。エビだ。なかなか立派な大きさのエビが居る。

「…おーい。そのエビさんよ…」

道を尋ねようとしたマミヤを見るなり、エビは死にものぐるいの素早さで、飛ぶようにして逃げた。しばしの間彼は呆気にとられた。

(ああそうか…。コイだもんな…)

この姿では何に会っても道を教えてくれないだろう。同じコイに会ったところで、こんな飢餓状態の水中じゃ因縁をつけられて面倒な事になる。

(水草は元気なだけどなあ)

再び山崩れの方向へ泳ぎ出す。次第に陸の匂い、山の土砂の匂いが鼻についてきた。

湖面の方を見上げてみると、黒い船底がぼつかりと見える。その權が少し動いてゆっくりと舟を動かしている。マミヤを誘導するらしい。

すると目前に黒い広がりが見えだした。崩れて滑り落ちてきた土砂がここまで来たらしい。だが、舟はまだ先へ進む。

土砂が流れ込んだ辺りには、まだ水草は生えていない。若干、視界も悪くなってきたが相変わらず生き物の気配はない。

頭上の舟がぴたりと止まる。どうやら気配が最大の所まで来たらしい。マミヤは早速、口を泥に付けてふがふがとやりだした。泥が周囲に吹き飛び口の大きさぐらいの窪みが出来上がる。場所をずらしながらそれを繰り返し、次第に大きな穴にしていく。全く地道な作業だった。これが続けて御神体を探そうというのだ。もうもうと舞う泥で、湖底の視界は瞬く間に悪化する。だがコイに化けているマミヤは、ヒゲを頼りに御神体の「味」を探っていた。鏡か何か定かではないが、妙な味がすればそれに食いつけば良いと思っていた。船上では数十分が経過していた。鴉子も狐衛も、ジツと湖面を見ていた。その時、何かが水中でキラリと光るのが見えた。

「！来ましたわ」

コイが一匹、湖面目がけて上がってくる。その口には何か、輝く物があった。

「御神体だ！」

狐衛は耳をピンと立てて興奮した。だが、その興奮はすぐに落胆と絶望に変わってしまった。

御神体は古い銅鏡だったのだろう。鋭い扇形の欠片が、コイの口から鴉子の手へと渡される。それが数回往復され繰り返されて、御神体の引き上げが終わった。舟の床には扇形、台形、三角形の様々な形に砕けた鏡が揃えられ、無念を訴えた。

「おいたわしい…」

狐衛の青眼が潤んだ。隣という事もあり、いくらか交流もあった。大きな湖を纏めていた水神の依り代は滅茶滅茶に壊れ、もはや用を成さなくなってしまった。

「これでは水神さまにお頼みするのは不可能だ。社が消えてしまった今、新しい依り代を用意するのも遅すぎる」

「何をそんなに焦るんだよ」

鴉子に掬い上げられ、舟の上に戻ったマミヤが言った。煙が沸き立ち、狸の姿になる。「久佐に居る化け物が、これから何をするか分かった物じゃない。これで白貝湖の護りは無くなり、奴の思い通りだ。さらに力を蓄えてこの地に災いをもたらすぞ」

「ご主人。下は静かなものですよ。不気味なくらいだ。魚が居なくなつて、貝ばかり肥えちゃつて…」

「何で貝が？」

「さあ…。二枚貝は水ばつかり吸い込んでますからね。何か栄養を水から摂ってるんでしょう。沢山オオシロシジミが居ましたよ。あれらが全部栄養を食つてるとしたら、そりゃ水の中は何も無くなりませぬ。そのうち、この湖には白い貝しか居なくなつちまうでしょうよ。もちろん、その後はシジミ達も自滅でしょうが」

「胡粉や貝焼きだけで生きていけると思つか！鴉子どの、私にはど

うすることも出来ない…。なんとか助けて貰えぬか」

鴉子はしばし考えた。とにかく今動き出さなければ、湖を元に戻すことは不可能になってしまう。…急激な変化を与える手段を講じる必要があった。

「 マミヤ。さっきの船着き場に戻って頂戴」

「へえい またお茶しに行くんですか」

「お腹一杯よ。それより、食後は運動でしょ」

第五章 騒動

長衛門は屋敷の縁側で一人、囲碁を打っていた。オオシロシジミで作った白石が、カヤの碁盤に打ち付けられるときに小気味よい音が響く。貝一匹から二枚しか取れないこの白碁石も、白貝宿の貴重な工芸品である。その白は、何を以てしても染め上げることの出来ない永遠の白さと輝きをもっている。

「だ…旦那さま」

下男がぱたぱたと駆けてきて、長衛門の前にやってきた。

「どうした」

「今朝の巫女さまがお会いしたいと、また…」

「お引き取り願え。忙しいと言っただけな」

「ですが…」

「確かにお忙しそうですね」

庭に、碁石にも負けないほど気持ちの良い声が響いた。長衛門は目を大きく開き、庭へずかずか入ってくる巫女と浪人、そして真っ白な狐を見つけた。

「 ですが、こちらはもっと急ぎの用なのです」

「…いくら巫女どのでも、これはあまりにも無礼なのではないかな」
彼は忌々しそうに浪人と、特に狐の方を睨みつけた。

「茶番はこれまでにして貰いましょう、久佐さま。どうも悪い空気

を吸われているようです。少し屋敷の外へおいで願えませんか」

「外へ出て行くのはあなた達だ。おい誰か！この方達をつまみ出せ！」

屋敷中から下男や下女がぞろぞろと現れた。皆、手に播り粉木やホウキ、大鍋用のヘラなどを持っている。

「おうおう。随分と面白いことしてくれる」

ママヤはニヤニヤと笑って、鴉子の前へずいと出た。鴉子は懐から何かを取り出し、被詞を唱えだした。

「先に無礼を働いたのはあなた方ですからな。さあ！出て行って貰いましょう」

「そうは問屋が卸さねえよ。いい加減出てきて姿を現したらどうだ」「なんの事かな」

長衛門は下男下女の前へ出てきて、にやつと笑った。

「こういう事です」

鴉子はママヤの後ろから飛び出し、久佐に向かって護摩木を投げつけ、見事眉間に打ち込んだ。

「ぎゃっ！」

短い悲鳴と共に、久佐は顔をしかめてよろけた。

「黒井大神の力を借りて命ずる！魂縛の意識を乱れさせ、打ち破れ！」

鴉子の叫び声だけが余韻を引いて響き渡り、全てがしんと静まりかえった。すると久佐を始め下男下女、騒ぎを聞きつけてやってきた久佐の女房や子供達までもが、ばたばたとその場に倒れ込んだ。そして、一気に空気が濁りだし、辺りが薄暗くなった。

「ご、ご主人……」

「来るわ。もう相手は人間じゃ無くなるから交渉は効かないわよ」「鴉子どの！」

狐衛は縁側に置かれた碁盤を指し示した。盤上の石達がガタガタと震え、碁石が納められている器が激しく踊り出して中の白石をぶちまけた。

「あれね。狐衛さまは下がって置いて下さい」

鴛子が碁盤から少し目を離した瞬間、マミヤが怒鳴った。

「あぶねえ！」

とっさに鴛子を押し倒し、地面へ這わせるマミヤ。そのすぐ上を、重さ一四貫（十五キロ）もある碁盤が突進し、すぐ後ろの松の枝を粉碎した。さらにその背後にある岩にぶち当たると、けたたましい音をたてて碁盤は真っ二つになってしまった。

二人と一匹はその場に呆然となって這いつくばった。依然、鴛子の右半身に覆い被さるようにしてマミヤがいた。

「あ、ありがとうマミヤ……」

「まだ頭はあたしの体に付いてますか……」

「大丈夫みたい」

マミヤの頭が無事かも確認せず、鴛子は縁側に散らばった碁石を睨んだ。

「残念。それは宣戦布告と見て良いのね」

（どっちかと言うと、ご主人が宣戦したんじゃない……）

マミヤの口から、要らぬ言葉が出そうになったが、すんでの所で押しとどめた。

そうこうしているうちに、碁石が一つ二つ宙に浮き出した。次々と白碁石が浮き上がり、最終的に白い塊のようになった。

「おお、やる気ですぜ。根性のある奴だ」

「あれは……」

狐衛は屋敷の屋根の異変に気付いた。

白い小さな礫のような物が、屋敷の裏から次々と雲霞のようにわき上がってくる。それらは屋根の瓦に落ち込むとカラカラと転がり落ち、白碁石の塊に合流していった。それらは全て、同じような白碁石だった。あつという間に白い塊は二倍、三倍と大きく膨れあがり、石と石がこすれ合ったりぶつかったりする耳障りな音が、辺りを包み込んだ。

「こんなに……」

「裏の蔵だ！出荷前の碁石が出てきたのだ！」

「ヤバいですよ。さっきの碁盤みたいな速さで投げつけられたら……」
「待って頂戴…今考えてる」

「今やんなきゃまずいですよ！」

「ママヤ！石壁だ、石壁で鴉子どのお守りしろ！」

狐衛が叫ぶ。ママヤの癩に障ったが、もつともだと思いついて変化をする。あつという間に石室が鴉子と狐衛を覆い、その直後に石が吹雪のように石室に打ち付け始めた。バチバチと、石と石（片方は実質、シジミの貝殻だが）がぶつかり合い、白石が打ち負けて砕け散り吹雪の中へ戻っていく音が聞こえた。

「思ったよりも力が強い奴ね…参った」

残念ながら鴉子は混乱していた。碁盤を投げつけられた衝撃から、未だ抜け出せていなかったのだ。

「狐衛よ。残念だけどこれじゃ雪隠詰めだぜ。いくら狸でも化けには限度がある。俺の腹が減ったら、その時は終わりだ」

「……………」

鴉子は唇を噛んだ。僅かな時間、混乱しただけで圧倒されてしまい、仲間を二人窮地に立たせてしまっている。今までにない後悔を感じていた。だが、それを誰に言えるわけでもない。とにかく何か策を練らねばと考えるが、何も出ない。

「…鴉子どの。我の神気を役立ててくれ」

重い空気の中、狐衛が口を開いた。

「…どういう事です？」

「存知の通り、我にはこの神気は持てあます。この半分でも鴉子どのお渡しすれば、貴女の中で力は真価を発揮して力を数倍に高めることができる」

「その後は…」

「神の力を以て、あの妖鬼を征伐するのだ」

「狐衛様はどうなるのです」

「……………」

狐衛の青い眼が、憂いを帯びた。

「あたしと同じ、長い年月を経た狐ですからね。それを支える力が無くなれば……」

マミヤの声に、鴉子はハツとした。

「…それも、我の立派な使命だ」

「」

鴉子は押し黙った。狐衛の青い眼を見つめているが、明らかに混乱の度が高まっている事がマミヤにはすぐに分かった。見かねたマミヤは言った。

「ご主人。そいつの言うとおりで。ここはやるべきです」

「」

「あたしゃ、碁石でボコボコになって死んでいくご主人や狐は見たくありませんや。それに、何もそいつから全ての神気を譲り受けなくたって良いんですよ」

「いや、マミヤ。そういう融通は出来な……」

「黙ってる狐衛！」

マミヤの怒声が響いたとき、迷いと焦りしか無かった鴉子の瞳が、サツと澄んだ。

「狐衛さま。少しの間、力をお借りします」

「あい、分かった」

「マミヤ。力をお借り次第、赤銅一式甲に変化して頂戴」

「…え」

「焚きつけたのはあなたでしょ！」

「そりゃそうですけど…。ええ…本気ですか…」

鴉子と狐衛は互いに向き合った。

「…どうすれば良いのですか？」

「額と額を合わせるのだ。あとは眼を瞑り、我に任せよ」

人間と狐は、お互いの小さな額を合わせた。鴉子はすうっと眼を閉じ、呟いた。

「狐衛様、必ず成功させますから待っていて下さい」

「……………」
狐衛は、答えなかった。

いよいよ、貝殻の吹雪は勢いを上げてきた。漁師の家からも貝殻を呼び寄せ、マミヤの石室外壁へたたき付けてくる。貝殻は砕け、白い砂となつて石室を覆う。次には二人と一匹を窒息させようとしている。

「マミヤ！ やつて頂戴！」

鴉子の声が石室内から聞こえると、マミヤは再び煙を噴き出して変化した。その直後、白い砂の吹雪は勢いをかき乱され、扇形に払いのけられた。突然の破局に驚いたのか、姿無き妖鬼は勢いを失い、後ずさるようにして屋敷へ退いた。

石室のあつた場所には、深紅の具足に身を包み、長巻を構えた武者が立っていた。小豆のように暗い紅は、直垂や籠手に装飾された金銀細工を引き立たせている。小さく引き締まった胸には鳥と獣が絡み合つて睨み合う図が施され、見る者を威嚇するかのようになり、ギラと光を反射していた。兜に施された前立ては大きく縦に歪んだ鋭い三日月で、左角だけが異様に伸び上がっていた。それを装着する者の顔面を守る面頬は黒く漆で塗り潰され、眼を覗かせる穴と、不気味に牙を剥いたように笑う口の意匠が施されていた。どちらが魔物か分からないほど、その面の笑い方は禍々しかった。そして、その面の塗りに負けず劣らず黒い髪が、兜の後ろから背中へ流れるように伸びている。これが、マミヤの化けでも最も特異な変化『赤銅一式甲』の姿である。

（へっ。 奴さん、ビビってますぜ）

兜の中で、マミヤの声が響いた。鎧を着込んでいるのは鴉子だ。「時間が無いわ。一気にたたみかけて、仕留めます！」

（ガッテン！）

紅い鎧武者は長巻を振り回し、突進しだした。

鴉子は一切、体を動かすような意識はしていない。拳動の決定は

マミヤに全権があり、鴉子は化け鎧を身につける依り代のようなものなのだ。

吹雪が勢いを取り戻す。白い粉は密度を高めて円柱を型どり、その底で鴉子とマミヤへ突進してきた。

(ご主人、頼みます！)

マミヤの意志で長巻が大きく振られる。それと同時に刃が青白く輝き、低音の単調な雑音を放ち出す。

「喝！」

鴉子の号令で長巻が振り下ろされる。白い円柱は青白い刃によって薙かれ、縦に真っ二つに裂けた。裂けたところからザラザラと砂が落ちていく。まるで力を吸い取られたかのように地面へ積もり落ちる。

砂の吹雪は、今度は密度を低くして鴉子達の周りをぐるぐる回り始めた。

「私達を吸い上げて、地面に叩きつけようって考えね」

(ご主人。こいつの本体はどこでしょう)

「本体はこの砂嵐全体よ。奴は貝殻の集合なのよ」

(何か策はありませんか)

「こっとう大きな集合ってというのは、渦を使って秩序を作っているの」

(はあ)

「眼もないこれらが、どうして私達を持ち上げてやるうと集まってくるのかしら」

(こっちが聞きたいですよ)

「私達の神気よ。それに反応して集合が波を起こす。波が連鎖していつて渦が幾つも見え、やがて大きな渦になる…」

(…ご主人?)

「標的が無くなれば渦は目標を失う。そして混沌とした砂嵐に戻るでしょうね。…でも神気を消すより、もっと現実的な方法がある！」
鴉子の眼はいつものそれと違った、ぎらついた輝きを放っていた。

マミヤは若干の不安を覚えた。

「マミヤ。私の考えが読める？」

（ええ…しかしそれは）

「問答無用！一撃ぶち込みます！」

鎧武者を取り巻く砂嵐はどんどん勢いを強め、濃密になっていく。確かにいくつもの小さい渦が、鴉子達のほうへ集まってきているようだ。すでに直垂や紐がバタバタとなびき、踏ん張っていないと持って行かれそうだった。

「黒井戸之命より遣われし者の体を依り代とし、土師之宮山神の神気をもつて、有象無象の妖魔を打ち砕かん！」

（黒井狸耶、^{マミヤ}九十九变幻の力で黒井戸之命遣いの者を護らんとす。

土師之宮山神の神気よ、有象無象の術力をはね除けよ！）

二人の声が唱和し、嵐の騒音にも勝るとも劣らぬ雑音が、再び長巻を取り巻く。刃が真つ赤に灼熱し、次いで真つ青になり、刃の芯が翡翠のような緑色を呈した。マミヤの長巻は神器となり、周りの大気を熱で歪め始めている。

鎧武者は嵐により吹き上げられ、空高く舞い上げられた。さらに追い打ちをかけるように砂嵐は逆さまの竜巻を形取り、その密度の高い鋭い尾で武者を串刺しにしようとする待ちかまえている。

「妖忌囁目！」

二人の声が重なり、ついに緑色に焦熱している長巻を、その逆さ竜巻目がけて投げつける。凄まじい神気で過敏症になりかけている鴉子によって増幅された力は、マミヤの召喚で集められた黒井戸之命の神気で長巻に凝縮され、翡翠色に燃える光芒となり、一直線にすっ飛んでいく。

逆さ竜巻の中腹に突き刺さった緑の光弾は、激烈な爆発などは起こさなかった。しかし直撃した周りからザラザラと大きく凹みだし、それが急速に拡がっていく。砂が風を切る音が気のせいか、洞穴の奥底から叫び上がるようなり声が、世界に響いた。

（仕留めましたね）

「……………」

（ご主人？）

「このまま、落ちてしまいわ」

（…そうですね）

鎧武者はそのまま、庭につもった貝殻の粉末の上へ落ち込んだ。軽く、ふわりと積もっていたおかげで、粉がもうもうと舞い上がって多少むせた以外は怪我はなかった。

粉とは違う煙がわき上がり、鎧武者は鴉子とマミヤに別れた。

「狐衛さま！」

鴉子はざぶざぶと胡粉の上を駆け、狐衛が隠れていると思われるあたりの粉をばさばさとかき回し、狐衛を探した。すると、尾っぽで鼻を隠し、耳を頭にひつつけて丸まっている古狐を見つけた。

「狐衛さま！私かわかりますか！」

狐衛はゆっくりと顔を上げ、白い毛が目立つ黄色い三角顔を見せた。鴉子を見つけると、嬉しそうに舌をべろりと出して歓迎した。

「良かった…。お待ちを」

鴉子は狐衛を抱き上げ、胸元に近い位置にもっていった。すると瞬く間に狐衛の姿は、元の銀毛がふさふさとした青い眼の狐に戻っていった。

「やあ…生き返った気分だ」

「なんとか、やり遂げました」

「盛大にやったようだ…。後始末が大変だ」

鴉子がふふつと笑うと、狐衛も眼を細めて笑い返した。その

後ろで、マミヤは人の姿で何かを探していた。

「あら？どうしたの」

「あたしの長巻…」

「え？」

「あれが無くなっちまったら、あたしや今日から丸腰でさ…」

解決の余韻に浸るのもそこに、二人と一匹は無くしものを探すために胡粉の層をひたすら掘る事になった。

第六章 前途

白貝宿から胡粉を一杯に詰め込んだ麻袋が、馬車に載せられ出発する。芸術の盛んな西の地で消費される事だろう。その馬車の行列を静かに見守る男女の連れ合いと、白い狐が居た。

「当分は胡粉が供給過多だろうなあ」
「マミヤはぼつりと言った。」

「困暮の白石にもなる。いくら取れても売り先には困らないから、増やしすぎたのもあるんだろうな」

狐衛が返す。

久佐長衛門は一連の騒動のあと正気を取り戻し、鴉子の訴えを聞き入れて水神の社を再建することを誓った。すでに中央府へ使いの者を走らせ、一週間後には再臨のための儀式が執り行われる事という事だ。祠の再建も始まっている。崩れた山肌やその周辺も綺麗に整理され、山肌には植林が行われることになった。数年後には大き

く育った木が土をしつかり包み込み、山崩れが起きにくくなるだろう。

貝だけではなく、魚の養殖も始まった。生け簀に稚魚を飼って大きく育て、宿場で消費するためだ。当分の間はオオシロシジミの養殖を控え、湖に栄養を蓄えていくという。

「ご主人。あの妖怪は一体なんだったんですかね」

「久佐さまに聞いたわ。なんでも一年ほど前に、手の平ほどもある大きなオオシロシジミが獲れたそうよ。白くて立派で…、それを白碁石に使ったんですって。それからシジミの養殖を思い立ったって言うから、おそらくは湖底の主か、水神様の眷属だったんでしょうね」

「人間の活動には極力干渉しないのが我々、神の掟。…それを逆手にとって、人間に神を襲わせるとは」

「まあ、今後はやりすぎ・獲りすぎに注意することだな…」

鴉子は狐衛に向き直った。

「では狐衛さま、私達もそろそろ出立します」

「うむ…。道中気をつけて参られよ」

「ええ。山神さまに、感謝の意を伝えて下さい」

「必ず。ああ、それとこれを」

狐衛はどこからともなく、文を取り出して鴉子に手渡した。

「土師之宮神社より感謝を込めて、この度のそなたらの活躍を示した物だ。中央で役に立つ事があるだろう」

鴉子はお辞儀をして、その文をありがたく頂戴した。その後ろで、マミヤはふらふらと詰まらなそうにしている。

「さあマミヤ、お待たせしました」

鴉子とマミヤはきびすを返し、北往道に行く旅に戻った。

鴉子は何度か白貝宿を振り返り、その出口にぼつりと座って見送る狐の姿を、目に焼き付け、ぼつりと呟いた。

「ちよなら…」

二時間ほど歩いたとき、鴉子は唐突に話を切り出した。

「ねえマミヤ」

「はい？」

「私に檄を飛ばしたときあなた、私と狐衛さまが死ぬのを見たくないって言ったよね」

「ええ…そうですね」

「それって、あなたは一人で逃げるつもりだったのかしら」

鶉子はマミヤに意地悪な笑顔を向けた。

「いやあ。そんなことないですよ。私の獅子奮迅の戦いをご覧に入れた事でしょう」

「で、形勢不利と見えて逃げちゃうのかしら」

「そんなことはございませぬ」

「あらあら…」

しばしの沈黙。草鞋が小石を噛んで立てる音だけが、静かに響く。

「これからの道中も、どうかお願いね」

唐突の改まった言葉に、マミヤは目尻をピクリと動かした。そして一言だけ返した。

「お任せ下さい。ご主人」

了

(後書き)

いかがでしたか？感想はもちろんの事、指摘や批評などありましたら、ぜひお聞かせ下さい。この作品の他にも色々書いていこうと思っ
ていますが遅筆のため、いついつに出来上がるというお約束はできません…。

前書きにも書きましたが、この「実験」について提案などがありましたら、ぜひご教授くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3913t/>

死にゆく湖

2011年5月20日23時40分発行